

近代日本におけるデンマーク農村社会論と地域構想

岡 田 洋 司

はじめに

1928 (昭和 3) 年に出版された平林広人『デンマルク』という著作は、“デンマーク”¹が当時の一つの流行現象になっているとして、次のように述べている。

デンマーク
丁抹の国情は今や、世界中に宣伝されて
ゐます。特に我国では、丁抹が一つの流
行をなしてゐるかの観を呈してまゐりま
した。或は産業組合に、或は社会事業等そ
れは各方面の引合に出されて居ります²。

すでに別稿で簡単に述べたように³、1920年代から 30 年代にかけての日本では、デンマークに関してのかなりおびただしい著作が刊行されているし、デンマークを取り上げた雑誌も少なくなかった。そして、そこではデンマークの酪農・協同組合・国民高等学校・デンマーク体操といった問題が論じられている。たしかに、平林の言うように“デンマーク”は 1920 年代から 30 年代にかけての「流行」現象だったのである⁴。

そこで注目したいのは、そうした著作・記事には、酪農・協同組合・国民高等学校といった個々の問題を越えた、デンマークという理想的な小農業国家での“地域社会”(ということばを仮に使っておくが)のあり方への関心が、かなり明確に存在していることである。つまり、言葉をかえるとデンマークは、地域社会のモデルとなっていたのである。

大きくいえば戦後の歴史学においては地域・地域社会のあり方と、そこでの人びとの生き方には大きな関心が払われてきた。そのため、地域という場における政治・社会運動、生活、教育・文化等々の実態を解明する膨大な研究が蓄積されてきた。

それにたいして本稿が問題にするのは、地域構想の問題である。

言うまでもなく地域・地域社会は自然に形成されるわけではない。地域・地域社会は支配層の支配・統治構想の具体化であると同時に民衆の側からの生活構想・自治構想等の具体化でもあり、その意味ではかなり意図的、意思的なかたちで形成されてきたという側面をもつ。したがって支配層のものであれ民衆の側のものであれ、その地域構想を検討することは、地域のあり方を検討するときにはさけてとおることのできない問題であるはずである。そして、その構想の解明は、とくに近代日本にそくして言うなら中央集権体制のもとでの地域・地域社会のあり方を端的にしめすことになると思われる。

こうした視角からの研究は、近年、地域、また地域史の方法が再検討されるなかで⁵、いくつが生れている。たとえば古厩忠雄や阿部恒久の「裏日本」についての研究、河西英通の東北についての研究等がそれであり、裏日本・東北という表象を手がかりに日本の中央集権

的な近代化のなかで“後進”地域が政治的、政策的につくり上げられとして、その具体的な過程を解明している⁶。

前述のデンマークについての言説は、こうした地域構想をふくみこむものである。その場合そうしたデンマークについて、とくにデンマークの農業・農村社会についての言説は、日本という国民国家なかでの、裏日本・東北といった広域の地域のあり方を対象とするものではない。他方、裏日本・東北のような“負”の価値を地域に背負わせるものでもなく、あるべき地域社会の像を提起するという積極的な意味をもつものであった。つまり、デンマークについての言説は、具体的な町村レベルでのあるべき地域像＝地域構想をしめすものであり、近代日本の地域のあり方を検討する場合、けっして小さくない意味をもつと思われる。

そこで、本稿では、スパンをややひろげ、1910年代＝日露戦後から1930年にかけてのデンマークの農村社会論とそのなかでの地域構想を検討し、その意味を考えたい。

註

- (1) デンマークは、明治初期には「丁抹」、あるいは「噠馬」と表記されたが、明治中期以降は「丁抹」が一般的である。なお、丁抹は1930年代まで使われる。また、片仮名では「デンマルク」とも表記された。ただし煩雑であり、本稿では基本的には「デンマーク」と表記する。
- (2) 平林『デンマルク』(文化書房、1928年) 1頁。
- (3) 拙著『ある農村振興の軌跡「日本デンマーク」に生きた人びと』(農山漁村文化協

会、1992年)、拙稿「日本デンマークの思想史」(『愛知県史研究』第6号、2002年3月)等。

これらの論考では1920年代から30年代にかけてのデンマークをめぐる言説を簡単に紹介したが、十分に論点を展開できたわけではなかった。そこで、本稿ではこの問題を、1910年代にさかのぼってあらためて本格的に検討するものである。

- (4) 近代日本におけるデンマークの農業・農村社会論の受容についての本格的な研究は、管見のかぎりでは野本京子「産業組合運動の展開過程におけるデンマーク農業論の位置」(『協同組合奨励研究報告』11、1985年)がある。

この論文は、日露戦後のデンマークへの着目から説きおこして、1920年代から30年代の産業組合運動におけるデンマーク農業論の位相をあきらかにした労作である。

野本は、1920年代以降のデンマーク論を産業組合という問題に限定して検討している。それにたいして、本稿は、本文中に示めたような意図にもとづき地方社会・地域社会の構想という視点から検討しようというものである。

- (5) 近年の地域史研究の動向・意義については、たとえば大門正克「日本近代史研究における1990年代」(『歴史評論』第618号、2001年10月)等を参照のこと。
- (6) 古厩忠夫『裏日本』(岩波書店、1997年)、阿部恒久『「裏日本」はいかにつくられたか』(日本経済評論社、1997年)、河西英通『東北—つくられた異境』(中央公論社、2001年)等。

I 地方改良運動のなかでの“地方”と“地域”

新渡戸稲造は、日露戦後、「ある一定の小さい面積を定めて、その歴史なり人情なり地理なり、所謂地方に関する事柄を悉く研究する」¹という「^{じかた}地方学」を提唱し、柳田国男等と研究会をはじめたことは、よく知られている。

新渡戸によれば、この地方学は「自治制度を全うするに付けても、亦他に逃げて行く青年を土着せしむるに付けても、即ち教育するに付けても、最も効用のある」²ものであった。

新渡戸たちは、それまでほとんど注目されていなかった地域・地域社会³を対象化して、そのあり方を精査・研究することによって、現実の地域社会の改善・改良の役に立たせようとしたのである。

日露戦後において、地域・地域社会に関心をもったのは、新渡戸稲造や柳田国男だけではなかった。とくに、日露戦後、「大日本帝国」をささえるべき地方社会の疲弊という状況に直面した内務官僚たち、またその周囲にある人びとは、地方・地域社会に視線をむけざるをえなかったのであった（その政策的対応が地方改良運動であった）。

この時期、日露戦争前に組織がえされた内務省地方局、あるいはその関係者はかなり精力的に地方自治・地方改良関係の刊行物を発行している（表1）。

これらの著作では、きわめて多くの地域の実例が内外を問わず取り上げられており、井上友一（府県課長）・中川望（市町村課長）等を中心とする内務官僚たち、および嘱託の留岡幸助・国府種徳・生江孝之等が、地方改良運動を推進するにあたって内外の“地方”の

実情と文献を相当に精力的に調査したことがわかる⁴。

それでは、官僚たちは具体的にはどの地域に関心を払っていたのだろうか。試みに内務省地方局編『地方自治要鑑』（1907年）が取り上げている事例と地域を表2によって見てみたい。

この著作は、この時期の内務官僚たちが意図する地方自治というものを包括的に論じた代表的な著作である。ここには、おもに国内の各地方からの事例が広汎に集められている。いずれも町村経営の改善がはかられた、また町村経営になんらかの特色が見られる地域である。

たとえば、のちには「模範村」として喧伝されることになる広島県加茂郡広村である。この村は、村債の償還に苦しみ、「之がために其戸長を替へたること幾回といふ数を知らず」⁵という難村であった。ところが村内の有力者藤田譲夫が戸長（のちには村長）に就任すると、精力的に財政整理をおこない基本財産の蓄積につとめ、日露戦後には1万3000円余りの蓄積ができるにいたった。他方、藤田は奢侈・華美をいましめ、勤儉を説き、副業を奨励した。その結果、この村は「今や副業の所得のみにても、一箇年尚二万余円に達し、遂にはさしものの難村さへ、全く面目を一変し、淳良にして勤勉なる一の良邑となった」⁶という。

あるいは、愛知県北設楽郡稲橋村は、林業を主産業とする奥三河の山村であるが、村長の古橋源六郎が神社を中心に人心をまとめ村の発展に尽力した⁷。とくに農会を設置して農事の改良につとめた。その結果、この村は「勤儉貯蓄、隣保団結の美風益々盛」⁸になり、「窮

表1 日露戦後の内務省地方局と関係省の地方自治・地方改良関係出版物

年	著 者	書 名	発 行 元
1906 年	江木翼	『自治之模範』	内務省地方局
	井上友一	『列国の形勢と民政』	報徳会（1901年の再刊）
	井上友一	『欧西自治の大観』	報徳会
1907 年	内務省地方局	『地方自治要鑑』	内務省地方局
	内務省地方局有志	『田園都市』	内務省地方局
1908 年			
	井上友一	『楽翁と須多因』	良書刊行会
1909 年			
	井上友一	『自治要義』	博文館
	井上友一	『救済制度要義』	博文館
	内務省地方局	『地方改良小鑑』	内務省地方局
	内務省地方局	『地方改良事業講演集』上・下	内務省地方局
	内務省地方局	『独国に於ける模範市政と理想農邑』	内務省地方局
1910 年			
	内務省地方局	『地方改良の要項』	内務省地方局
	内務省地方局	『欧米自治救済小鑑』	博文館
	内務省地方局	『地方行政史料小鑑』	内務省地方局
	床次竹二郎述	『欧米小感』	至誠堂
	内務省地方局調査原稿	『地方改良事績』	内務省地方局
	内務省地方局	『感化救済小鑑・欧米自治救済小鑑』	内務省地方局
1911 年			
	井上友一	『都市行政及法制』上・下	博文館
1912 年			
	内務省地方局	『地方改良実例』	内務省地方局
	井上友一	『自治之開発訓練』	中央報徳会
	床次竹二郎述	『地方自治及振興策』	実業之日本社
	内務省地方局	『世界六大強国国勢比較』	内務省地方局
	水野鍊太郎	『自治制の活用と人』	実業之日本社
刊行年不明	井上友一講述	『自治興新論』	早稲田大学出版部

註 i. かならずしも網羅的ではなく、重要と思われるものに限定した。

ii. 複数回出版されているものの場合、基本的には最初に出版されたものを表示した。

表2 内務省地方局編『地方自治要鑑』が取り上げている地域

地 域 名	『地方自治要鑑』が取り上げた事例
奈良県高市郡飛鳥村	一村和合の楽園
広島県加茂郡広村	勤勉の良邑
千葉県安房郡白浜村	甲辰会による産業の振興、風紀の改善
徳島県里浦村	蛤講と船講
愛知県北設楽郡稲橋村	神社を中心とする村治・民風の改善
長野県南佐久郡大沢村	前村長安部善蔵による植林事業
三重県阿山郡玉滝村	村治にたいする投書箱、産米検査
岩手県下閉伊郡崎山村	篤志なる地方吏員
福井県敦賀郡松原村	私財をなげうって灌漑用水をつくった村長
東京府西多摩郡戸倉村	有志による財政整理
兵庫県出石郡神美村	篤志家平尾在寛父子による村治の改善
新潟県北蒲原郡独川村	一刀会・一吟会による尚武の風の養成
千葉県君津郡吉野村	村長式内三郎の努力
熊本県阿蘇郡北小国村	有志会と婦人の自治への参加
兵庫県宍粟郡富栖村	村長吉田清治の精勤と有志者との協力による公有林整理等
奈良県山辺郡丹波市町御経野	貧民部落の改善
徳島県名東郡佐那河内村	萱講による村内改善
沖縄県久米島	島島から移住した住民の共同経営
ニューヨーク	R・アッペーによる「紐育児童訓育倶楽部」
奈良県宇陀郡	事業美談の郡公報掲載による、自治心・公共心の涵養

註 ページ数の都合で第3章までに限定してある。

民なく、曩に戦役〔日露戦争一引用者〕に際して、出征者の家族にも、一人も受給者〔賑恤救済金の一引用者〕を出さざりき」⁹というまでに経済状況は改善された。

とりあえず2例をあげただけであるが、この『地方自治要義』に例示された地域は、地域社会自体のモデルというよりは地方改良のモデルとしての側面が強い。しかし、当然、ある種の地域構想を内包するものであった(正確に言えば、それは当事者の地域構想であると同時に、それを事例として取り上げた内務省地方局の地域構想でもあるが)。広村や稲橋村の例からわかるように、そこには次のような契機がふくまれている。

- ① 政治的、社会的、経済的な対立や軋轢等がなく、全体が融和的な状態にある調和的世界であること。
- ② 一定程度の経済的發展。
- ③ ①②を実現するための規範の存在。具体的には挙村一致という融和的イデオロギーと勤儉に代表される通俗道徳的価値意識。

ようするに、一定の生産力を前提とした調和的世界(また、それは国家の基盤としての位置をあたえられている)が官僚たちが理想とした地域社会だったのである。内務官僚たちは、一方では地主—自作—小作という階級の矛盾が顕在化しはじめ、他方では資本主義

からの攻勢が強まり村落の秩序が動揺している現実の農村を改善・改良し、こうしたモデルに近づけようとしたのであった。

おそらく、この基本線は、その後の地方行政のなかでも受けつがれることになる。そして、このような状態を実現している（と思われる）いくつかの村（たとえば先の広村・静岡県加茂郡稲取村・岐阜県恵那郡蛭川村・愛知県渥美郡野田村等々）を、内務省は「模範村」として表彰して喧伝したのであった¹⁰。

また、この『地方自治要鑑』には、欧米各国に地方社会・地域社会の改善・改良の範＝モデルをもとめる態度もうかがわれるが、それは『地方自治要鑑』だけの問題ではない。前掲の表1のようにこの時期の内務省関係者の著作には、井上友一『列国の形勢と民政』、同『欧西自治の大観』、内務省地方局有志『田園都市』、井上友一『楽翁と須多因』、内務省地方局『独国に於ける模範市政と理想農邑』、同『欧米自治救済小鑑』、床次竹二郎述『欧米小感』、内務省地方局『感化救済小鑑・欧米自治救済小鑑』等、欧米の地方自治・地方改良の事情について叙述したものも多く、そこでは、欧米各国の地方社会・地域社会の改善策・改良策の事例が集められている。

表3は内務省地方局編『欧米自治救済小鑑』（1911年）で取り上げられている諸外国の事例の一覧である（この著作はかならずしも救済事業だけに限っていない。また、ここでの傾向は前述の著作の多くの傾向でもある）。

この著作は全体で97の項目からなっている。その内訳を見ると、ドイツ（33）・英国（23）・米国（19）・フランス（9）という順になっている。旧来の先進国としての英国・フランス、新興の先進国としての米国、そして、

それらに比べれば後進的な要素はかくせないが、日本と同じく国家的契機が強く、発展のあとをいじるしいドイツが内務官僚たちの関心の的なのである（もちろんアジア諸国は一顧だにされない）。また、ここで丁抹＝デンマークが3項目ほど取り上げられていることが注目されるが、この点については章をあたらめる。

この著作であげられる事例も、地域社会全体のあり方というより地方改良のための個別事例が多い。「独国に於ける報徳社的の施設」「米国ライマン感化院の設備」「北米合衆国に於ける少年自治団」「仏国マローサン村に於ける葡萄酒醸造販売組合と其の効果」「丁抹国における産業組合と鶏卵共同販売組合」等々がその典型である。

ただし、地域社会全体のあり方に着目した場合がないわけではない。たとえば「田園都市」の場合である。

この田園都市については、先の『欧米自治救済小鑑』では「英国レッチウオールズの田園都市」というかたちで取り上げられている。また、前掲の表1のなかにも内務省有志『田園都市』があるように、田園都市はこの時期の内務省関係者に大きな関心がもたれた地域のあり方である。

田園都市という概念を主張したのはE・ハワード（Howard, Ebenezer 1850-1928）である¹¹。

ハワードは、1902年刊行の『明日の田園都市』のなかで、「田園都市」という都市＝地域社会のあり方を提起した。彼のいう田園都市とは、「健康的な生活と産業のために設計された町」¹²である。具体的には田園地帯で取りかこまれ、ひろすぎはしないが、個々人が社

表3 『欧米自治救済小鑑』での国別事例一覧

国 名	項目数	おもな地域とテーマ
ドイツ	33	ベルリン、ミュンヘン、バーデン、リックスドルフほか ・独国カールスルーエの大公園 ・独国に於ける報徳社的の施設 ・独逸の労働保険
英 国	23	ロンドン、グラスゴー、アバーデーン、バーミンガムほか ・英国レッチウオールズの田園都市 ・英国ポート、サンライトの新農村 ・英京倫敦の盛観
米 国	19	ニューヨーク、シカゴ、デトロイトほか ・米国ライマン感化院の設備 ・北米合衆国に於ける少年自治団 ・米国に於ける青年会の趨勢
フランス	9	マローサン、ヴォスジュ、ル・マンほか ・仏国マローサン村に於ける葡萄酒醸造販売組合と其の効果 ・仏国の公立質局と細民の恩沢
デンマーク	3	・丁抹国における産業組合と鶏卵共同販売組合 ・丁抹国の振興 ・丁抹に於ける農業労働者協会
そのほか、ベルギー3・スイス2・オランダ1・オーストリア1・ロシア1・ほか2		

会生活を営むには十分な大きさをもつ。インフラも整備されている。また、その土地はすべて公的所有であるか、もしくはそのコミュニティに委託されている。そして、現実には、1903年からロンドンの北西50余kmのレッチワースで田園都市が建設されはじめたのである。

これは、単純な地域社会の改善・改良策ではなく、地域社会の一つのあり方を提起するものであり、日露戦後において、現実のさまざまな問題をもつ地域社会を改善・改良することに腐心していた内務省関係者の関心をひいたのである¹³。

以上のように日露戦後において、とくに内務省関係者は、それまで彼らが十分に関心をもったとはいえない“地域社会”にある程度の関心をもちはじめたのであり、そのなかで欧米の地域社会の状況にも関心がもたれはじ

めたのである。

註

- (1) (2) 新渡戸「地方の研究」(『斯民』第2編第2号、1907年5月) 20頁。
- (3) なお、本稿が対象とする時期には「地域」「地域社会」という言葉は使われないが、本稿では、当時の町・村、あるいは地方という言葉を含む概念として、地域・地域社会という言葉＝概念をもちいる。また、場合によっては農村社会という言葉をもちいるが、当時の記述にあわせたもので、いささかあいまいな使い方であるが、実態としては地域・地域社会とほぼ同義である。
- (4) 内務官僚ではないが、内務省囑託として地方改良運動のなかで大きな役割をはたした社会事業家留岡幸助の日記(編集委員会『留岡幸助日記』第2巻・第3巻、矯正協

会、1978年・79年）を見ると彼が内務省の嘱託として地方社会の実情をこまめに調査していることがわかる。また、愛知県立農林学校校長で、直接内務省には関係のない山崎延吉は、1910（明治43）年7月から翌年1月にかけて欧米を視察しているが、これも内務省（と農商務省・愛知県）の派遣によるものであり、内務省は山崎に「欧米ニ於ケル地方改良事業ノ調査ヲ嘱託」（吉地昌一編『我農生三十年 興村行脚』（山崎先生還暦記念刊会、1932年、5頁）したという。

(5) 『地方自治要義』7頁。

(6) 同前8頁。

(7) なお、この古橋源六郎（古橋暉兒）の次男古橋義真（彼も源六郎を名乗った）は稲橋村だけではなく、東加茂郡長・北設楽郡長をつとめるとともに、愛知県農会副会長として愛知県の農政に大きな影響をあたえた。この2人については、芳賀登編『豪農古橋家の研究』（雄山閣、1979年）、芳賀登『維新の精神 豪農古橋暉兒の生涯』（雄山閣、1993年）ほかにくわしい。

(8) 前掲『地方自治要義』15頁。

(9) 同前16頁。

(10) 模範村については、遠藤俊六「模範村の成立と構造」（『日本史研究』第185号、1978年1月）参照。

(11) ハワードはじめとするイギリスの田園都市構想とその研究史については、西山八重子『イギリス田園都市の社会学』（ミネルヴァ書房、2002年）が詳細に論じている。

(12) ハワード・長素連訳『明日の田園都市』（鹿島出版会、1968年）。内務省地方局有志『田園都市』は、内務省地方局有志『田園都

市と日本人』（講談社文庫、1980年）として香山健一の解説をつけて復刻されている。

(13) 西山前掲書によれば、「明治から昭和前期にかけてイギリス田園都市論は、わが国に多様な形で紹介された。しかし、田園都市という言葉のもつイメージのためか、たとえば田園調布などの緑豊かな郊外住宅地と置きかえられ、誤解された面もある」（11頁）という。

Ⅱ 日露戦後におけるデンマークの浮上—デンマークの復興への関心

以上のように日露戦後の内務官僚たちのあいだには、地方社会・地域社会、とりわけその改善・改良への関心が強まっていった。その場合、イギリス・アメリカ・フランス・ドイツ等の列強とそこでの地方社会のあり方への関心が強かったが、前掲表3によればデンマークへの関心もあらわれていたことがわかる。

幕末以降、近代日本でデンマークについての叙述をもつ最初の著作は、管見の範囲では福沢諭吉『条約十一国記』（1867年）である。とはいえ、この著作では「丁抹は往古欧羅巴の北の方に於て大国と呼ばれし国なれども、当時は大に衰微して昔の姿にあらず」とそっけない。少なくとも、とくにデンマークに関心をしめしているわけではない。あるいは開国したばかりの日本の自立・独立を模索していた福沢の眼中には、プロシアとの戦争に敗れたばかりの北欧の敗戦国のことなどなかったのであろうか。

他方、岩倉具視の視察団の報告書、久米邦武編『米欧回覧実記』（1878年）はデンマークの国情をある程度具体的に紹介している。

ここではデンマークで視察したことがかなり具体的に記述されており、「一般ミナ質朴ニテ、生業ニ励ミ、奢麗ノ風ニ淫セサルハ、欧州第一ナルベシ」²とその国民性が高く評価されている。

そして、こうしたデンマークへの関心がある程度出揃うようになったのが日露戦争前後のことであった。

具体的には日露戦争前後には、佐藤寛次（東京高等農学校講師）や西垣恒矩（大日本産業組合中央会書記）等のデンマークの産業組合論などがあらわれるが、この点については、前掲野本論文にくわしい³。それ以外にも、日露戦争直後に出版された農商務省編の欧米の養鶏事情についての報告書、『欧州諸国 養禽及産卵業』（農商務省、1905年10月）は、「今や家禽ノ奨励ヲ必要トスル時期」（農商務省農務局長・酒匂常明）⁴という認識のもとで欧米各地の養鶏の実態を報告しているが、デンマークは最初におかれ、かつ巻末に「丁抹国家禽協会規則」「丁抹家禽改良協会規則」等が付冊として付されている。デンマークは、養鶏の先進国として関心を払われていたのである。

しかし、日露戦後には、そうした産業組合・養鶏といったいわば個別の問題を超えて、敗戦した小国が半世紀をへて農業を軸に奇跡的な復興を遂げたということへのひとかたならぬ関心が表面に出ているのが大きな特色である。

前述の『欧米自治救済小鑑』は、「丁抹国の振興」というかたちでデンマークという国家全体、もしくは地域社会全体の復興のあり方に着目している。

デンマークは、1848－50年と64年の2度にわたってプロシアとオーストリアとの戦争

をおこなった。デンマークは破れ、国土中でもっとも肥沃な農業地帯（シュレスヴィッヒ、ホルスタイン）はプロシアに割譲された。この「丁抹国の振興」は、そうした状態からデンマークがどのようにして復興をとげたかに着目している。

丁抹は千八百六十四年を以て独逸と戦端を開き、戦敗の余、領土の約三分の一を割譲したるが為め、一時は国力も全く地に墜ちたりしが、其の後国民の一致協力して、精励到らざるなく、一意農業の改良と、副業の奨励とに盡力して、専ら国力の恢復を図りし結果、竟に今日の殷昌を見るに至りしなり⁵。

それは、この『欧米自治救済小鑑』だけの問題ではない。たとえば、報徳会（1912年、中央報徳会と改称）の機関誌『斯民』である。

同誌は地方改良運動の機関誌的な性格を持ち、そのため欧米各国の地方社会、また地方改良の事情が多く紹介されているが、そのなかでデンマークについての記事も散見される。そうした記事は、なぜデンマークに内務官僚たちが着目したかを、先ほどの『欧米自治小鑑』以上に端的に物語っているように思われる。

たとえば、第6編第7号（1911年7月）の無署名「世界之知識」は、R・ハガード（ライダー・ハツガードと表記されている）の著作への英誌の書評を次のように引用紹介している。

此書の刊行は小農の保護と訓練とに、最も意を致し、その結果丁抹が今日海外に輸出する農産品は年々一億八千万円の巨額に達し、如何なる寒村僻邑に到るも、土地は最も善く利用せられ、一人の無職

業者なく、電話は普及し、電灯は戸々に燦然として輝きわたり、民は撃攘鼓腹して喜色に満ち世界に比類を見ざる幸福なる生活を営みつゝあり。加ふるに農業教育は普及して、農村の青年男女の為には、到る処、農業教育を受くべき高等の学校あり、農業教育ある婦人は、二週間に一度は各地の農村を訪問して、農家の家畜飼育方法に就き指導するあり。〔以下略〕⁶

ハガード（Haggard, Sir Henry Rider 1856 - 1925）は、一般的には、『ソロモン王の洞窟』『洞窟の女王』を書いたイギリスの冒険小説作家として知られている⁷。ノーフォークに生まれ、グラマースクールを卒業後、外務省に勤務。南アフリカに赴任し、ボーア戦争等を経験した。その後、そうしたアフリカでの体験を生かした創作活動に入った。

ハガードの本領はアフリカを舞台とした冒険小説であるが、いっぽう農政研究にも関心をもち、“Rural England: being an account of agricultural and social researches carried out in the years 1901 & 1902”（1902）等の著作がある。また、1912年には、その面での功績によってナイトに叙せられた。デンマークについては“Rural Denmark and its lesson”（1911）という著作があり、『斯民』が引用した書評の対象はこの著作だと思われる⁸。

明治初期に福沢諭吉がヨーロッパ全体を見渡したとき、デンマークは前述のように存亡の危機にある惨めな敗戦国にすぎなかった。そのため福沢はデンマークにほとんど関心をもたなかった。しかし、それから半世紀後にはデンマークは農業を中心として経済的に発展し、ハガードによれば農村に電話があり、農業教育が普及し、というような豊かな農業

国となっていた。それを、内務官僚たちは驚きをもって受けとめたのである⁹。そしてそれは、内務省・内務官僚をはなれて、たとえば周知の内村鑑三『デンマルク国の話』（1913年）へとつながっていくのであった¹⁰。

註

- (1) 福沢『条約十一国記』（『福沢諭吉全集』第二巻、岩波書店、1959年）185頁。

なお、近代以前の日本とデンマークとの交流については、長島要一「初期日本・デンマーク文化交流史について」（『日本歴史』第479号、1988年4月）参照。

- (2) 久米邦武編『米欧回覧実記』4（岩波文庫、1980年）140頁。

- (3) 野本前掲論文 228 - 34頁。

- (4) 農商務省編『欧州諸国 養禽及産卵業』（農商務省、1905年10月）序文。

- (5) 前掲『欧米自治救済小鑑』75 - 76頁。

- (6) 「世界の知識」（『斯民』第6編第7号、1911年10月）4頁。

- (7) ハガードについての日本語の本格的な研究は管見の範囲にはなく、以下の記述は、おもに『ブリタニカ国際大百科事典』のハガードの項目によった。

- (8) ハガードのデンマーク関係の著作については、ハーバード大学、British Library、Library of Congress等の所蔵図書を検索したが、本文中の著作1件のみしか確認できなかった。なお、同書は、1913年、内務省地方局訳『丁抹の田園生活』（博文館）として刊行されている（なお同書では、ハガートと誤記されている）。また、井上友一は、『自治之開発訓練』（1912年）のなかで、ハガードの『農業丁抹』という著書に言及し

ているが（376頁）、当然、同一の著書であろう。

この著作は日本におけるデンマーク受容のキーになる著作と思われるが、前掲野本論文では未見とされているので、いささか煩雑ではあるが内務省地方局訳『丁抹の田園生活』にしたがって目次をしめしておく。

第一篇 丁抹に於ける田園生活の実況

第一章 丁抹の一旧都／第二章 「ブラウアップ」共同製酪所／第三章 「ラデルンド」農学校／第四章 「アスコフ」庶民高等学校／第五章 「ヘネベルグ、ラデガード」農場／第六章 「オールース」及養豚農場／第七章 「オーガールド」／第八章 コペンハーゲン／第九章 国定小農制度とワーゲ氏の意見／第十章 信用組合銀行／第十一章 国定小農制度及共同組合に関するシヤウ氏の意見／第十二章 国定小農地の実況／第十三章 リングステット農民学校及「ベーコン」調製所／第十四章 有名なる寺院／第十五章 コペンハーゲン給乳会社／第十六章 鶏卵輸出連組合／第十七章 「リングスビー」農学校及戸外博物館／第十八章 「コレコレ」農場／第十九章 ノルゴスコフに於ける教授マール氏の農場／第二十章 ヘルシンゲルに於ける一小農場／第二十一章 ヒレレッドに於ける小農場／第二十二章 「トリフォリアム」酪乳場／第二十三章 ニェコエビング精糖場／第二十四章 一大農場／第二十五章 フアルスターの於ける小農場／第二十六章 丁抹における小学教育／第二十七章 コーペンハーゲンに於ける

王国畜産専門学校

第二篇 丁抹に学べき教訓

第一章 丁抹農業に関する所感／第二章 丁抹農業の経済的地位／第三章 丁抹に於ける農業／第四章 丁抹に於ける共同組合／第五章 豚肉調製所／第六章 購買及販売組合／第七章 家畜改良組合及監督組合／第八章 協同組合論／第九章 小農地保有問題／第十章 丁抹に於ける国家と農業との関係／第十一章 丁抹に於ける肉類審査、焼印制度並に農業助成金／第十二章 結論

(9) また『斯民』では、その先の展開がある。

つまり、このハガードの著作を紹介したのは一木喜徳郎（内務次官）であるが、彼は「小農保護」という問題を中心にハガードの著作をかなりくわしく紹介している（一木「丁抹に於ける小地主奨励」『斯民』第6編第12号、1910年3月）。また、このデンマークの小農保護制度（自作農創設策）への着目は、『斯民』＝一木喜徳郎だけの問題ではない。たとえば井上友一は1912（大正元）年の著書、『自治之開発訓練』のなかで小農の保護という問題を論じ、そのなかでハガードの著書によって、デンマークの小農保護策を紹介している。当時、小農保護問題は大きな農政上の問題であり、一木らは、現実におこなわれており、かつ効果をあげているデンマークの小農保護政策に関心をよせたのであった。なお、デンマークの農地解放の歴史については、かなり以前の著作であるが御園喜博『デンマーク 変貌する「乳と蜜の流れるさと」』（東京大学出版会、1970年）参照。

- (10) なお、内村が『デンマルク国の話』としてまとめられることになる講演をおこなった年代（1911年）からすれば、ハガードの著作を読んだ可能性はあるが、内容的には一致しない。

Ⅲ デンマーク受容の本格的展開

デンマーク研究家平林広人は、冒頭に引用文を掲げた『デンマルク』（1928年）に先立ち、1924（大正13）年に出版した『農民の国デンマルク』という著作のなかで、当時の日本におけるデンマークの受容について次のように述べている。

欧米人のデンマルク研究は中々盛なものであるが、わが国では大正二年に内務省で『丁抹の田園生活』と題して、英国の文豪で農業経済研究者エツチ、アール、ハツガード卿の名著『田園丁抹とその教訓』〔英文タイトル省略－引用者〕の訳書を出したのと、大正四年に那須皓氏が訳述して『国民高等学校と農民文明』と題して発表した独逸のアー、ハー、ホルマン博士の力作『丁抹の庶民高等学校』〔独文タイトル省略－引用者〕の二書があるのみで、それさへ今日では絶版になつて手に入れることも出来ない。たゞ彼の地を視察して来た人々や、滞留して居つた人々によつて二三の新聞や、雑誌に片々たる記事が散見されるに過ぎない¹。

前述のように日露戦後において、デンマークはその復興のあり方がとくに内務省地方局の関係者の注目をひいた。そして、それは、平林の叙述にあるようにハガードの著書の訳出、あるいはホルマンの著書の訳出へと発展した（平林は、ここでは内村鑑三の著作につ

いてはふれていないが、参考文献のリストではあげている）。なお、ホルマンの『国民高等学校と農民文明』は、デンマークの国民高等学校を、その創始者グルンドウィ（1783－1892 ドイツ風に言えばグルントヴィッヒ）の意図から説きおこし農民文明の一環として位置づけた著作である。

とはいえ平林が述べているように、彼がこの著作を刊行した時期までは、デンマークへの関心は十分には展開していたとはいえなかった。しかし、『農民の国デンマルク』につづく平林の第2作『デンマルク』が刊行された1928（昭和3）年あたりには、デンマークは流行現象となり、表4にしめしたように多くの著作（大半は視察記）が刊行されていたのである²。

また、雑誌でいえば、しばらくデンマーク関係の記事がとだえていた『斯民』でもふたたびデンマークについての記事があらわれるようになった³。さらには愛知県碧海郡の一部は「日本デンマーク」と称されるようになり⁴、「デンマーク」という表象が、現実の日本の地域社会に投影されるまでになったのである。

北海道庁農業技師で、デンマークの農村事情について2冊の著作を著した山田勝伴は次のように述べている。

〔前略〕今日の我農村状態を丁抹の過去に照合せて見ると、丁度四十年前に於ける丁抹の窮状に彷彿たるものがある、随つて方今我邦でも農村の振興に力を注ぐ事が必要だとすれば、それは何を云ふよりも先づ善き模範を示して居る丁抹農業発達跡を踏むのが近道である⁵。

ここで山田は「農村の振興」という言葉を

使っているが、これは、一般的な言葉ではなく第一次世界大戦後の農業・農村社会の状況に密着した言葉である。

日露戦後に問題になったような農業の沈滞、農村社会＝地域社会の疲弊という状況は、そ

の後も解決されたわけではなかった。それどころか、第一次世界大戦を契機とする資本主義の発展の結果、農業・農村社会は決定的に資本主義・都市へ従属することになった。そのため、農業・農村社会の沈滞があらためて

表4 1910年代から30年代にかけてのデンマーク農村社会についての主要著作

年	著 者	書 名	発 行 元
1912 年	農商務省商務局調	『丁抹保険法』	農商務省生産調査会
1913 年	A・H・ホルマン(那須皓訳)	『国民高等学校と農民文明』	東文堂
	西垣恒矩	『丁抹の産業組合』	大正館
	R・ハガート(内務省地方局訳)	『丁抹の田園生活』	博文館
1924 年	国民教育奨励会	『丁抹の農村と其教育』	同会
	平林広人	『農民の国デンマルク』	文化書房
	矢野一郎	『北欧でんまーく物語』	日本青年館
1925 年	北海道畜牛研究会	『丁抹の農業』	同会
	H・W・フォート(水野常吉訳)	『丁抹の農村と其の教育』	民友社
	山田勝伴	『余が見たる丁抹の農村』	有精堂書店
1926 年	協調会	『丁抹に於ける農村の更生と教育』	同会
	I・ヴェラム	『貴国に告ぐ 丁抹の農業事情』	東京公民社
	田子一民	『恵まれざる日本農村とデンマークの農民精神』	フロント社
	和田日出吉	『丁抹の農民組合』	平凡社
	木下一雄	『丁抹の国民教育と国民大学』	モナス
	小出満二	『デンマルク農民教育』	東京公民社
	ホルマン(永野芳夫編輯)	『丁抹の国民教育と国民大学』	モナス
	農林省畜産局編	『丁抹王国家畜保険論』	農林省
1928 年	山田勝伴	『農業の丁抹』	昇文堂
	平井正之	『興国の大原動力デンマアクの国民体操』	ジャパンタイムズ 国際パンフレット通信部
	上塚司	『理想的農業国 デンマーク土産』	泰文館
1929 年	長崎常編訳	『現代丁抹の農村研究』	文明協会
	岩井尊人	『最近のデンマークと農業の合理的共同経営』	有斐閣
	野田義夫	『丁抹国民高等学校の研究』	同文館
	大橋清蔵	『丁抹の農村視察記』	島根県農会
	C・クリステンセン(小沼宗十郎訳)	『丁抹の産業組合』	産業組合中央会
1930 年	平林広人	『丁抹農民文化の真髄』	文化書房
	横尾惣三郎	『欧米農村巡り』	農村研究会
	大橋清蔵	『丁抹文化の真髄と農村教育』	東洋書院
1931 年	産業組合中央会編	『丁抹の共同肥料購買組合』	産業組合中央会
	日本勸業銀行調査課	『丁抹の農業』	同課
1932 年	日本体育学会編	『丁抹と基本体操』	日本体育学会
	安達勇・安達隆世	『丁抹の土に親みて』	北海出版社
	玉川教育研究所	『丁抹フォルクダンス』	玉川大学出版部
1934 年	宇都宮秀夫	『丁抹から何を学ぶ?』	日本青年館
1935 年	増田亮一	『デンマークで掴んだ農村更生の秘訣』	泰文館

註 i. 野本前掲論文の表1を参考にしたが、筆者の判断で取捨し、野本論文にないものも付け加えた。あわせて野本論文を参照されたい。

ii. かならずしも網羅的ではなく重要と思われるものに限定した。

問題化したのであった。三重県知事であった内務官僚の田子一民は、デンマークについての著作のなかで次のように日本の農村の状況をなげいている。

農村の人々が異口同音に皆謂ふ。農村は厭だ。農業は難儀だ。農業はソロバンに合はない。農民は万代貧乏だ。農村には娯楽がない。百姓にはよい嫁が来ない。

妻になり手がない⁶。

山田の言う「農村の振興」（あるいは「農村振興」）とは、そうした状況にたいして農業関係者を中心にして呼号された言葉であり、1920年代にふたたびデンマークへの関心が表面化したのは、この時期の農業問題・農村問題を解決するというきわめて実践的な課題があったからである。

そして、日露戦後期には、デンマークの復興のインパクトが表面に出ていたのにたいして、この時期になると、一歩進んで、その復興・発展の要因の追求へと関心の方向はより具体的になる。

デンマークが「夏期でも平均六十度〔華氏。摂氏では約15度—引用者〕を過ぎぬ。〔中略〕加之、地味は頗る宜しからぬ」（小出満二）⁷という冷涼な気候風土のなかで農業を発展させ、それを基礎に国家・社会を発展させたとするならば、まずもって、そうした状況を克服したデンマークの農業のあり方そのものに関心がむけられたのは当然であろう。

とくに関心が集中したのは、具体的には第1に畜産＝酪農であり、第2にそれをおこなっていくうえで大きな役割をはたした産業組合をふくむ各種の協同組合であった。そして、現実には北海道ではこのデンマークに範をとった酪農が導入されたし、産業組合・協同組合

については、産業組合中央会が、デンマークの産業組合事情をくわしく紹介していった⁸。

また、前掲の著書は、そうした農業の基礎としての農業教育・農村教育のあり方にも注目する。

当時の日本の農業教育は、十分にその役割をはたしていなかった。「我が国農村の教育制度を見るに、余りに形式に過ぎて、都市の学校の縮図の如き現在の農村学校を以てしては〔中略〕余りに実務と離れて、徒に物識りを作るの弊を助長するばかりである」（水野常吉）⁹。こうした現状のなかでは、デンマークの、農業や「土」に親しませる教育は著者たちの強い関心をひいた。

また、とくに著者たちが注目したのが国民高等学校である。国民高等学校は高等教育機関に進まない一般国民、とくに農村青年たちの人格的、人間的向上をめざす教育機関であった。国民高等学校は、かならずしも狭義の農業教育をおこなうものではなく、農村青年たちの人格の向上をめざすものであったが、これも、デンマーク農村のみならずデンマークという国家の発展をささえるものとして著者たちは強い関心をよせたのであった。

以上のように1920年代から30年代にかけては、日本の農村の状況を背景にデンマークへの関心がきわめて強いものとなり、かつそれは、酪農・協同組合・国民高等学校・デンマーク体操といった個別の問題ごとに具体的に展開していったのであった。

註

- (1) 平林『農民の国デンマルク』（文化書房、1924年）1－2頁。なお、この著作は、1929年刊行の平林『デンマルク』の後半にその

ままのかたちでおさめられている。

- (2) 1920年代から30年にかけて表4のようなかたちでデンマークに関する多くの（膨大などといってもいいかもしれない）著作があらわれ、ある意味では「デンマーク学」ともいうべきひとつの認識体系をつくり上げている。それらの著者は、たしかに田子一民のようなエリート官僚もいたが、大多数は地方技師であったり、農会関係者であったり、平林広人のような民間の研究者であった。その意味では、デンマーク学があるとするれば、それは、鹿野政直の言う「民間学」といえるのではなかろうか。

なお、この時期、民力涵養運動など地方改良運動につづく官側からの地域社会の再編の動きがあらわれるが、そこではデンマークはほとんど問題になっていない。デンマークは民間の側の問題になったようである。

- (3) 1921（大正10）年における『斯民』のデンマーク関係のおもな記事は次のようなものである。

中島半太郎「丁抹の愛国者グランドウキグ」（第16編第10号、1921年10月）、下村寿一「丁抹の国民高等学校を視る」（第18編第1号、1923年1月）、山田勝伴「丁抹の農村を視察して」（第18編第8号、同年8月）、村田宇一郎「丁抹農村の繁栄」（同号）、佐上信一「丁抹フレデリックスボルグ国民高等学校にホルガーベークツルツ博士を訪ふ」（第19編第8号、1924年8月）等。

- (4) この点については、前掲拙著『ある農村振興の軌跡「日本デンマーク」に生きた人びと』で論じておいた。

- (5) 山田『余が見たるデンマークの農村』（1925

年、有精堂）11頁。

- (6) 田子『恵まれざる日本農村と丁抹の農民精神』（1926年、フロント社）序文。
(7) 小出『デンマルク農民教育』（1926年、東京公民社）。
(8) この点については、前掲野本論文参照。
(9) 水野「序文」（H・W・フォート、水野訳）『丁抹の農村と其の教育』（1924年、民友社）1頁。

IV 地域モデルとしてのデンマーク

ーデンマーク研究家平林広人のデンマーク農村社会論を軸として

1. 農村社会の理想

ー平林広人の描くデンマーク農村

以上のように1920年代から30年代にかけて、日本の社会ではデンマークについてのさまざまな言説が展開していた。それらのデンマーク論は、前述のように酪農・協同組合・国民高等学校・デンマーク体操といった個別の問題ごとに具体的に展開していった。

とはいえ論者たちの問題関心は、そうした個々の問題のなかに閉じこもるわけではなかった。著者たちは、個々の問題を超えてデンマークの農村社会＝地域社会のあり方（また、そこでの人びとの生き方）という問題にまで関心を払っていたようにも見えるのである。正確に言えば、彼らの個々の問題についての言説のなかに、おのずから農村社会＝地域社会のあり方が透かし見ることができるといことであろうか。それを典型的にしめすのは平林広人である。

表4の著作の著者たちはかならずしもデンマークの専門家ではない。多くは数週間から数か月の短期的な視察によってデンマークに

についての著述をあらわしたのであった。それにたいして、平林は現実にデンマークでの滞在経験も長かったし、みずから「デンマーク研究家」を名乗っていた点が異色であった。

平林広人¹は、1886（明治19）年、長野県東筑摩郡上川手村に生れた。家はもともと善光寺街道沿いの脇本陣で父親は村長の経験もあった。松本中学に進んだ頃から農村問題を研究していたが、当時出入りしていたメソジスト派の教会の牧師から、せまい耕地しかない信州の農業を発展させるには、デンマークの農業・農村のあり方が参考になるという示唆を受け、英訳されたデンマークに関する書物を借りた（年代的に言えば、前記ハガードの著作の可能性はない）²。そのためデンマークに留学してデンマークの農業・農村事情を研究し、帰国後はデンマーク研究家を名乗った。

平林は3冊のデンマークの農村社会についての著書を上梓している（それ以外、アンデルセンの文学の翻訳等がある）。最初の著作『農民の国デンマルク』（1924年）は、1回目の短期の留学＝視察の後に書かれたものである。2番目の著書『デンマルク』（1928年）は、1924（大正13）年から1年半の留学を経て帰国後に書かれたものである。前著を全面的に組み込んでいるが、あらたに書かれた部分は、当然、1年半のデンマーク滞在の諸経験を反映したものとなっている。また、その2年後には『丁抹農民文化の真髄』（1930年）という3番目の著作を刊行している（ただし、これは、『デンマルク』の後半部分を独立させたものであり、基本的には『農民の国デンマルク』と同一）。それ以外にも『帝国農会報』『斯民』『農政研究』等の雑誌にデンマーク関

係の論稿をよせているし、全国各地でデンマークについての講演もおこなっている。

また、農政ジャーナリスト古瀬伝蔵らと農村文化協会を設立し、その事業の一環としてデンマークについての映画を製作したこともあった。

平林広人は、デンマークの農民と農村社会についての次のように言う。

日本では農民といふと、土百姓だの、田舎者などといつて馬鹿にされる傾向がありますが、丁抹では農民は議会に於てもその主勢力を握つて居りまして、どし／＼意見を提出してをります。出版物がまた多く、農村にはいつてゐます。国家の中堅をなすものは農村で、その地位を農民が大多数で占めてゐる次第であります、従つて農民の社会的地位、文化的地位は非常に高く、そして今後益々向上して行く傾向を示してをります³。

こうした状況（日本とはあまりに対照的な）を前提に、彼はデンマークの農村社会を具体的に次のように描く。

デンマルクではオルガンを持つのは中以下の農家で、以上の農家ではピアノ一台位は持っている。〔中略〕彼のデンマルク人の家庭にはピアノがあるばかりでなく、書籍が沢山ある。丁抹人は其の家にある書物のみでは満足しない。それには村落各所で書籍倶楽部（図書館）を設けて居る。これも皆国民高等学校を卒業した人に依つてなされて居る。そして之を管理する者は日本の小学校教員位の資格ではなく、何れも博士階級である⁴。

また、こうした農村社会像は平林だけのものではない。北海道庁技師山田勝伴は、自分

が滞在していた村で若い農民の女性がピアノを弾いたり、村の公会堂で地元の音楽家による音楽会が開かれるような状況にある種の羨望をもって書き記している⁵。あるいは元愛知県農務課長横尾惣三郎は、「応接間も二箇所あつてピアノ、オルガン、書庫、夕食後の家族団欒など定めて愉快だらうと思はれる」⁶というような農村の家庭の状況を描いている。

また、こうしたデンマーク農村の充実ぶりは個々の家庭の問題だけではない。デンマークの農村では公会堂・図書館・病院・道路といった各種インフラも整備されていた。平林ではなく、先ほどの山田勝伴の記述を引用しておこう。

丁抹の田舎は道路がよく、如何なる道路も自動車や自転車が通れるが此のメアン〔著者が滞在していた村—引用者〕を通じて定期自動車が、鉄道と反対の他の方向に通ふて居る、田舎の村であるが到つて便利で電信電話は勿論電灯も通じて不自由のない村落である⁷。

あるいは、横尾惣三郎によれば、「活動写真や芝居は勿論諸所にあつて丁抹は世界一の自転車王国で、道路も善いから都会に出掛けて行く事は極めて容易」⁸ということになる。デンマーク農村はオルガン・ピアノ・書籍、あるいは電信電話・自転車・自動車、さらには図書館・公民館・道路等々、きわめて恵まれた状態にあり、そのイメージは日本の農村社会とはかけ離れたものであった。それを、平林はじめ各論者は羨望をもって記しているのである。

ところで平林は、一般論であるが農村振興のために解決すべき点として次の3点をあげている。

一、土地に投下する資本と労力に対して能ふ限り豊かな回収を得ること。即ち農業経済問題

一、農民の日常生活が健全であり、且つ愉快的な社会生活を送り得る事。即ち農村社会生活問題

一、農村問題は農民自ら之を解決すること。即ち農民政治問題⁹。

これらの条件から考えれば、平林は、農村社会が発展するためには、政治・経済等さまざまな意味で、農民全体が農村社会の、また社会全体の主体となること、また、それを前提として自分たちの生活を充実させることを必要条件としているように思われる。

先に引用した、デンマーク農村の状態は、そうした条件が満たされていることの表象なのであり、ピアノ・応接間・図書等を表面的なイメージでとらえてはならない。また、その場合の農民というのは、一部の経済的に恵まれた農民＝地主ではなく、実際の農業を中心的にになう自作農のことである。平林は、農村社会の発展・充実を一部の地主だけでなく、実際の農業をになう広汎な農民の問題としてとらえているのである。そして平林は、デンマークではそれが実現されているとして、それを「現代の農村文化が確証され」¹⁰たものとして、言葉をかえれば「農村文化」が実現されたものとして表現している。逆に言えば、デンマークの農村社会＝地域社会は、農民たちが社会の主体となり、それを前提として自分たちの生活を充実させているような場なのである。

2. デンマークの農村社会＝地域社会の基礎
そうしたデンマークの農村社会＝地域社会

を実現させた直接的な基礎は、言うまでもなく農業である。協同組合による酪農を特徴とするデンマーク農業は、デンマークについてのほとんどの論者の共通する関心事であり、平林もさまざまなかたちでデンマーク農業に言及している。

平林によれば、デンマークの農民も、以前は「敵〔資本家－引用者〕の手をかりて、自身の収穫物を販売」¹¹し、そのため「有らんに限り低い価格で、唯一の生産者がその生みの子のやうな産物を手ばなす」¹²ような農業のあり方を甘受していた。デンマークの穀類（小麦・大麦等）中心の農業は、資本主義の発達につれ、そのなかに組み込まれ、農産物は商品としての性格をつよめ、その流通・販売は資本の側にイニシャティブをにぎられることになっていたのである。さらに1880年前後には、デンマークの穀類本位の農業は、「機械的大農組織のアメリカ農産物との競争」¹³、および「ドイツの輸入防止を目的とした関税の制定」¹⁴によって窮状はいっそう甚だしいものになっていた¹⁵。

そういった状況にたいしてデンマークの農民たちは、第1には産業組合＝協同組合を導入することで資本の側に対抗しようとし、第2には酪農を導入することによって穀物中心農業から脱却しようとしたのである。

前述の著作のなかには北海道の農業関係者のものはいくつかある（北海道畜牛研究会『丁抹の農業』、山田勝伴『余が見たる丁抹の農村』、同『農業の丁抹』、安達勇・安達隆世『丁抹の土に親みて』等）。それらの著作は、気候条件から稲作には適さない北海道（道南においてもある程度安定的に稲作がおこなわれるようになったのは、1920年代末のことであっ

た）の農業を、気候風土の似かよったデンマーク農業を模範にして改善しようとしている。具体的には酪農という経営形態に強い関心をしめしている¹⁶。

それにたいして、平林の場合、酪農という農業経営のあり方よりは協同組合という組織の存在により大きな関心を払っているように見える。

他の列国に於ては資本家の経営に属する各種の施設もデンマルクにあつては全く農民組合の力によつて巧みに経営されてゐる。バターチーズの製造をする。牛も豚も自身に屠殺し販売する。鶏卵の収集販出をする。家畜の糧秣や農用機械器具はもとより日用品の末に到るまで各国の市場で直接購入する。自ら銀行を經營し、自ら信用の維持をする。自ら家屋並に家畜の保険を附す。純系優種の家畜や馬匹の系統維持を図る。大量購入をしては小売捌を為す。〔中略〕組合によつて丁抹農民は自身に資本家となつた¹⁷。

その場合、前提となっているのは自作農（平林は小資産農業者という言葉をししばもちいている）¹⁸の多さである。表5はデンマークの自小作別農家戸数を一覽にしたものである。

一見してわかる自作戸数の比率の高さである¹⁹。平林をはじめとする論者たちは、「多くの小作農業によって耕作さるゝ農業は、独り農業として不健全なるのみならず、此の如き農業を有する国家もまた健全でない」（出納陽一）²⁰として、小作地が多いこと（さらには地主制そのもの）を否定的にとらえており、その意味でもデンマークの農業は理想であったのである。

表5 デンマークにおける自小作別農家戸数

(単位：戸，パーセント)

年度	農家総戸数	自作戸数	小作戸数
1850年	180,090 (100.0)	103,518 (57.5)	76,572 (42.5)
1860年	211,315 (100.0)	146,234 (69.2)	65,081 (30.8)
1873年	239,419 (100.0)	194,263 (81.1)	45,156 (18.9)
1885年	263,432 (100.0)	225,255 (85.5)	38,177 (14.5)
1895年	270,918 (100.0)	236,709 (87.4)	34,209 (12.6)
1905年	289,130 (100.0)	289,130 (89.9)	29,256 (10.1)

註. 平林『デンマルク』212頁付表を加工。

また、デンマークの農村社会＝地域社会を実現させたのは、農業だけではない。国民高等学校を中心とした農業教育・農村教育の普及が、デンマークの農村社会＝地域社会をつくり上げるのに大きな力を発揮したのである。

アメリカの農業教育者W・H・フォート（前述の著作中の『丁抹の農村と其の教育』の著者）は、1924（大正13）年11月、日本をおとずれ各地で講演しているが、その講演のなかでデンマーク農業・農村が発展したのは「只デンマークの農民が最も共同的和合的科学的な方法に依つて農業を経営したから」²¹とし、そうした農民の態度をやしなったのが、デンマークの「土を掘る教育」「土にしたしむ教育」²²であったとしている。こうした認識は、日本の論者たちにも共通する認識であった。デンマークについての著者のほとんどは、デンマークの農業教育・農村教育に関心をもち、それに対象をしばった著作も少なくない。たとえば、小出満二の『デンマーク農民教育』（1926年）は、デンマークの学校教育体系から説きおこし、小農者学校・家政主婦学校・農学校・国民高等学校とデンマークの農業教育・農村教育の実態を体系的に紹介している。

デンマークの農村教育・農業教育を評価することは平林も共通している。平林も、デン

マークの農村教育・農業教育は、「他日その終生の職業として土地を愛耕する若き農民の素地を整頓せんがため」²³に大きな役割をはたすものとして高く評価している。

ただし、平林（および、そのほかの論者も）、直接的な農業教育のみに注目しているわけではない。具体的には国民高等学校である。

国民高等学校は前述のように高等学校に進まない一般国民、とくに農村青年たちを対象とする教育機関であった。全寮制をとり、農村青年たちの人格の向上をめざすものであり、直接的な職業教育・農業教育よりは歴史・文学等の教養科目が重視された。そして、この国民高等学校は、一般的な農村教育・農業教育にもまして大きな関心をむけられたのである。

平林は、国民高等学校がおよぼす影響を2つに整理している。

第1は「国民精神の涵養」²⁴という問題である。つまり、国民高等学校は、一面では「独立して国家の一員としての責任を果たし得る所の教養ある人間」²⁵の育成につとめるものであった。平林は、この国民高等学校の、農村青年たちを農村社会・農業を超えて国家全体のにない手とするという役割を高く評価したのであった。それは、デンマークでは農村

青年たちも国家の中心的な存在として位置づけられているということであり、平林は、そもそもそうした農村青年が国家の主体になっていくということに注目していたのである。

第2に国民高等学校は、「国民経済の指導」²⁶に大きな役割をあたえた。このことは、具体的には、協同組合との関連で論じられる。平林は日本とデンマークの信用組合にたいしての態度を比較して次のように言う。

信用組合などにしても、日本のそれに比較して見ると、非常に違っております。

日本のは貯蓄するためのそれであるのかの様な観を呈してゐますが、寧ろそれを生産に利用して行くものでなくてはなりません。〔中略〕丁抹ではそれを国民高等学校によつて、完全に理解していますから、彼らは如何にそれを組み立つるべきかの見識をちゃんと握つてゐるのであります²⁷。

ある種の農本主義のように精神主義的に農業の意味を理解させようとするのではなく、資本主義のもとでの経済原則を理解させ、そのもとでの農業のあり方を教えるのも国民高等学校の役割だったのである。

以上のように平林は、酪農中心に協同組合によっておこなう農業、また国民高等学校に代表される農村・農業教育、この二つを、デンマークの農村社会＝地域社会をつくり上げた基礎として高く評価しているのであった。

その場合、少なくとも平林においては、そうした基礎は、ローカルな世界で閉じられた問題ではなかった。酪農にしても、国民高等学校にしても、資本主義という世界システム、あるいは国民国家という問題につながったか

たちで問題にしている。そのことは農村社会＝地域社会もまた、資本主義・国民国家という問題につながっているということであり、いささか強引な言い方をすれば、平林は、農村社会＝地域社会をそうした資本主義、あるいは国家社会全体のなかで独自の意味をもつものとして位置づけるという視点をもっていたと言えるのではなからうか。

3. 自由・平等な社会関係

以上のようなかたちで、平林広人、およびそのほかの著者たちは、デンマークの農村社会＝地域社会の状況を描き、かつそれが形成された要因を見きわめようとした。

そうしたデンマークの農村社会＝地域社会であるが、ここで見すごせない大きなポイントがある。

ある論者は、デンマーク農業の発展を、「丁抹民族の真の民主的共同精神の熱烈なる適用」（和田日出吉）²⁸によって生み出されたというように「民主的」という言葉をもちいて説明している。これは具体的には、協同組合中心の農業のあり方を指している。協同組合では、比較的ヒエラルキッシュな関係の少ない運営（という言い方はしていないが）がなされ、それがデンマーク農業の発展につながったというのである。その前提は、前述のようにデンマーク農村では自作農（その意味は本章の注17参照）がきわめて多いということである。つまり、そうした運営は、自作農が主体となっており、彼らを中心にある程度の平等性をもった「民主的共同精神」が発現されたかたちで運営されているのである。

また、そうした自作農を中心とした平等性の強い社会関係は、組合のみならず地域社会

全体の傾向でもあった（と平林たちは把握している）。平林たちが描く、近隣が和合してお茶会を開いたり、村で音楽会を開催するデンマーク地域社会のあり方は、地主中心にヒエラルヒッシュな社会関係が存在する日本とは異なり、自作農が多いことを前提とした「民主的共同精神」が生きている“場”なのである（もちろんそれは実際には限定をつける必要はあろう）。そして、平林たちが描いた、農民たちが自分たちの生活を充実させ、自分たちの可能性を解放しているデンマーク地域社会の状態は、そうした社会関係と表裏の関係にあるのである。

さらに、そうした平等性・民主主義はさまざまなかたちで拡大されている。たとえば、農民たちは政治的権利ももつ。「丁抹では農民は議会においてもその種勢力を握つて居まして、どしく意見を提出しております」²⁹。また、女性の立場も尊重されており、世界に先駆けて選挙権も得ている。

一九〇八年以来市町村の参政権を婦人にも拡張したが、越えて一九一四年進むでフオルクケツティング即ち衆議院に対して参政権を獲得して今日では事実上全デンマルクの婦人はすべて選挙権を有つてゐる³⁰。

以上のように平林広人をはじめとする1920年代から30年代にかけてのデンマーク論は、デンマークの地域社会（また社会全体）のもつ平等性に注目している。また、その前提として、デモクラシーや民主主義というものを肯定的にとらえている論者が多い。「人格の内部的自由はこの学校〔国民高等学校—引用者〕の最高の法則である。〔中略〕国民高等学校はデモクラシーの精神と一致する」（木下一雄）³¹。

この点がこの時期のデンマーク農村社会論の一つの核となっているようであり、その意味でこの時期のデンマーク論には大正デモクラシー思想が反映している、あるいはその一部であるということができよう。

ようするに、平林らの認識によれば、デンマークの地域社会は、自作農を中心とする人びとが、平等な社会関係を前提に協同で農業にあたり、その農業による経済的發展により人びとが農業・農村社会に誇りをもちつつ、いわば人間としての可能性を開花させている場なのである。そして、平林は、そうしたデンマークの地域社会を日本の地域社会のモデルとしたのである。

註

- (1) 岩淵文人『祖父平林廣人』（1987年、著者刊）。なお、平林については、拙著『農村青年＝稲垣稔 大正デモクラシーと〈土〉の思想』（1985年、不二出版）210頁以下参照。
- (2) ただし、このエピソードは岩淵前掲書ではなく、ご子息の平林偕行氏のご教示による。
- (3) 平林『デンマルク』（1928年、文化書房）後半6頁。なお、同書は前半・後半ごとにノンブルがふられている。
- (4) 平林「デンマルク漫談」（蛭川）岐阜県恵那郡蛭川村交親青年団機関誌『済美』1927年9月34頁・42頁。
- (5) 山田『余が見たる丁抹の農村』（1925年、有精堂書店）264頁。
- (6) 横尾『欧米農村巡り』（1930年、農村研究会）48頁。
- (7) 山田前掲書236頁。
- (8) 横尾前掲書10頁。

- (9) 平林前掲『デンマルク』後半18頁。
- (10) 同前後半17頁。ただし平林は「農村文化」を正面からは定義していない。
- (11) (12) (13) (14) 同前前半26頁。
- (15) デンマーク農業の歴史的変遷については、御園前掲書参照。
- (16) 北海道におけるデンマーク受容については、浅田英祺・崎浦誠治『乳と蜜の流れるさと：北海道デンマーク交流史』（北海道デンマーク交流史刊行会、1983年）にくわしい。
- (17) 平林前掲『デンマルク』後半25頁。なお、和田日出吉『丁抹の農業組合』（1926年、平凡社）によれば、当時のデンマークの農村には、次のような組合組織があった。製酪組合・ベーコン製造組合・鶏卵出荷組合・共同畜牛出荷組合・種子供給及び種子育成組合・飼料供給組合・肥料供給組合・信用組合・荒蕪地改良組合・保険組合等々。
- (18) 平林は、Husmand（フスマン）という言葉の訳語として小生産農業者、あるいは自作農という言葉をもちいている。平林によれば、フスマンはもともとは小農であり「小作」と訳された場合もあった。しかし、この段階ではフスマンは、現実には7ヘクタールから20ヘクタールほどの経営をおこなっており、小作という訳語は適さない（同前5頁）。同時に、日本の自作とも所有規模・経営規模の点でまったく異なっている。本稿ではそうした限定をつけたうえで、少々便宜的ではあるが「自作」という言葉をもちいる。
- (19) 日本の社会の場合、たとえば平林が『デンマルク』を出版した1928（昭和3）年の場合でいうと全農家戸数548万8917戸中、

- 378万2347戸（68.9パーセント）が小作農（自小作等をふくむ）であった（加用信文監修・農政調査委員会編『改訂 日本農業基礎統計』農林統計協会、1977年）。
- (20) 出納「徹底せる小農保護法」（北海道畜牛研究会編『丁抹の農業』1925年、同会）354頁。また、論者の多くはそうした自作農を増加させた「小農法」（1899年）・「新小農法」（1919年）にも大きな関心を払っている（それらはかつて一木喜徳郎によって『斯民』誌上でも紹介されたが）。
- (21) (22) 『名古屋新聞』1924年11月6日。前日、名古屋でおこなわれた講演の内容紹介である。
- (23) 平林前掲『デンマルク』後半81頁。
- (24) 同前後半109頁。
- (25) 同前前半16頁。
- (26) 同前後半109頁。
- (27) 同前後半110－111頁。
- (28) 和田前掲書2頁。
- (29) 平林前掲『デンマルク』前半6頁。
- (30) 同前221頁。
- (31) 木下『丁抹の国民教育と国民大学』（1926年、モナス）15頁。

おわりに

デンマークについての言説は、日露戦後、地方＝地域社会の改善・改良が焦眉の急となり、諸外国の地方・地域事情、さらにはその改善・改良策が紹介されるなかで徐々にあらわれるようになった。たしかに、そこではデンマークは、欧米のさまざまな国々の一つ以上の位置づけをされていたわけではなかったが、それでも、デンマークの戦争からの復興の過程は、一部の注目を受けるようになった。

そうしたデンマーク論が本格的に展開するのは、1920年代から30年代にかけてのことであった。そうした1920年代以降のデンマーク論は、現実の日本の地域社会の状況への批判であり、ある種の憧憬を込めたユートピア的な地域モデルの提示であった。

地域、地域社会というものは、近代日本において中央集権体制による上からの近代化が推進されるなかで、その負の側面を背負わされた場である。また、大ざっぱに言えば地域社会は、富国強兵路線、あるいは帝国主義路線をあゆむ国家の基礎として位置づけられた。そして、そうした文脈でさまざまな編制・再編の試み（典型的には地方改良運動）はあっても、それ自体として独自の価値を認められたとは言にくいし、そのあり方を民衆＝地域生活者の立場から本格的に構想するという志向にもとぼしかった。

本稿であつかったデンマークに関しての言説のうち日露戦後までのものは、そうした帝国主義路線の基礎としての地方社会＝地域社会再編という必要性のなかで着目されたという性格が強い。しかし、1920年代以降のものは、地域社会を民衆の生活の場としてとらえ、少なくとも結果としては、その理想像を提起することになっていると評価できよう。

そこで描かれたのは、自作農を中心とする農民が、生産・社会生活・文化等々の局面においてそれをになう主体になり、地域社会は、そうした農民たちの人間的な可能性を解放する場となっているというデンマークの状況であった。

それらのデンマーク論は、もっともそれを精力的に展開した平林広人の場合をふくめ体系的に問題を論じているわけではない。短期

間の視察から得た表面的なイメージを独り歩きさせているといえないこともない。しかしながら、デンマークの地域社会をめぐる言説が提起している地域社会をめぐる問題はかなり本質的な問題である。

たとえば協同組合による酪農の問題である。これは、ようは稲作というモノカルチャー（せいぜい「米と繭」）であった日本の農業を、資本主義の発展のなかにどのように適合させるかという、資本主義というシステムが確立したなかでの地域社会存立にかかわる大きな問題であった。あるいは、ピアノ・書籍等という文化の問題は、そうした表面的な、いわば“ハイカラ”なイメージの問題ではなく、農民が生産・社会生活・文化生活等々の局面において地域社会の主体になっていることの表象であったはずである。また、政治的権利の問題をふくめた平等性や民主主義の問題も、デンマーク論を構成する大きな要素であった。その意味でデンマーク論のなかに込められた意味は重いのである¹。

ただし、ある意味では当然であるが、こうしたデンマーク論で提起された地域社会像は、そのまま現実のものとなっていったわけではない。

日露戦後の地方改良運動のなかで、内務官僚たちがもつめた地域社会の理想は、ようするに一定の生産力を前提とした調和的世界であった。それは現象的には、1920年代から30年代にかけてのデンマーク論も同じである。しかし、前者の場合、地主制という制度はそのままに通俗道徳的規範を強調することによって、また、産業組合の普及など生産の側面に問題を限定して、その実現をはかろうとしていた。それにたいし、後者の場合、一歩

踏み込んで、それを実現するための自作農創設のための制度的、法律的な問題にも強い関心を払っていた、換言すれば地主制というシステム自体を批判する視点があったことが大きな差である（前者においても一木喜徳郎等はこの問題に関心をしめしていたが）。

とはいえデンマークについての言説の多くは、現実にはデンマークの農村社会像をとりあえず描いたものという性格が強く、制度的問題にまで視点はおよんでも、実現のための方法までは議論がおよんでいない（それは無い物ねだりではあるとしても）。

そのため、その後の展開を見れば、1930年代の恐慌とそれにつづく農山漁村経済更生運動の展開、さらに戦争のなかで、デンマーク論が展開した文化・民主主義・生活、さらには自作農の創設という問題は後退し、農業、とくに産業組合の発展というかたちに問題が限定され²、さらに恐慌・戦争のなかでそれさえも実現できないまま地域社会をデンマーク化する可能性はとりあえず消えていくことになったのであった³。

註

- (1) また、デンマーク論としていえば、狭義の地域構想を超えて国家構想にも発展していくような契機をもっていた。

平林広人『農民の国デンマルク』（1924年）には、教育学者（元京都帝国大学総長）沢柳政太郎の序文がついている。そこには次のような一節がある。

我が日本は国土は狭小で、しかも其大部分は棲息に耐へない、又利用もできない山岳で占められ、天然の資源は極めて貧弱の国柄である。一面には人口の増殖率

は高く、一方発展の余地は多く閉ざされて居る。〔中略〕私は国民の知徳を進め能力を高めて行く外に我が日本の発展に光明あらしめる道はないと思う（序文1頁）。

これは一種の「小国主義」であり、そのモデルがデンマークなのである。なお、そうしたデンマークを小国主義のモデルとしてとらえる発想は、内村鑑三『デンマルク国の話』のなかにはより明確にしめされている。

- (2) 1934（昭和9）1月から雑誌『家の光』に連載された賀川豊彦の小説「乳と蜜の流れる郷」は、主人公が、階級闘争的な小作争議と対決しながら、産業組合という協同組合によって理想を実現するさまが描かれている（これは日本の物語であるが賀川はデンマークを視察しており、表題から言ってもデンマークの農村社会のあり方が下敷きになっているはずである）。デンマーク論が展開した文化・民主主義・生活、さらには自作農の創設という問題が、背景に追いやられていく状況を表現しているように思われる。

- (3) なお、戦後にもデンマークを理想とする見方は持続している（あるいは再燃している）。たとえば、『家の光』第22巻6号（1946年7月）は、「北欧の文化国家を語る」という座談会の記事でデンマークの農業・教育等を問題にしており、戦後の文化国家の実現という文脈で、デンマークについての関心が再燃してきたように見える。

付記

本稿でもちいた史料は、安城市歴史博物館・稲垣恒夫氏・東京大学農学部図書館・名古屋

屋商科大学図書館・北海道大学図書館・蛭川村（岐阜県恵那郡）図書館・三重大学図書館・早稲田大学中央図書館等の所蔵のものである。また、安城市歴史博物館の史料閲覧と利用については安城市史編さん事務局に便宜をはかっていただいた。以上、謹んでお礼申し上げたい。

（2003年1月23日成稿）

（おかだ・ようじ 日本近代史）